

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：14303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25820307

研究課題名(和文) イタリアにおける地理的領域と生産拠点に関する都市史的比較研究

研究課題名(英文) Comparative Studies of urban history on productive sites and geographic territories in Italy

研究代表者

赤松 加寿江 (Akamatsu, Kazue)

京都工芸繊維大学・グローバルエクセレンス・講師

研究者番号：10532872

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はヴェネトとトスカーナというイタリアのふたつの地域における生産的居住の拠点を比較対象とし、領域史的視点から地域の空間と社会構造を解明した。地理的、気候的環境が類似する2つの地域の丘陵地帯には、同質な生産環境が存在しているが、ヴェネトにおけるヴィラを中心とした生産拠点と、トスカーナにおけるメツアドリアにもとづく生産拠点とでは、土地所有、土地利用における相違が特徴的であり、それは景観の相違に結びついていることが明らかとなった。定住と一連の生産加工プロセスの観点から地域を捉え直すとする本研究は、領域史研究の新たな視角と方法論の可能性を提示したといえる。

研究成果の概要(英文)： This study analyzed spacial and social structures made by productive center in Tuscany and Veneto in Italy from the point of view of territorial history. The hilly areas in these two regions have the similar productive environment because they have the similar geographical condition and climates.

Nevertheless the similarities of these areas, this analysis made clear that spacial and social structures of two regions are organized different context made by land ownership and land use. In Veneto the productive centers were formed in Villas and in Tuscany the territories were organized the historical context of "mezzadria", these differences conduct the landscape features.

This study was an approach to reconsider the territory from the productive logics. It is important as the new point of view and the methodology for the territorial history.

研究分野：イタリア都市史

キーワード：生産 居住 都市史 トスカーナ ヴェネト 領域史

1. 研究開始当初の背景

(1) 領域への視角

イタリアでは都市の「歴史的な中心地区 centro storico」に対する関心に加え、1970年代以降、都市の外側に広がる「領域 territorio」にも関心が向けられ地域の保全計画が検討されてきた。政治領域のみならず、経済学的、生物学的な領域をふくむ包括概念であるイタリア語の「テリトリオ」は、近年、日本の都市史研究においても注目され、都市、集落、建築、さらに広がる大地を読み解く領域史研究の展開が期待されている。

これまで申請者は祝祭と都市整備を領域的に捉える研究を展開させ、その研究成果として、アルノ川流域が婚礼巡幸や宮廷の移動によって政治的価値を高め、干拓や灌漑による生産拠点が領域形成の核となったことに注目し、領域史の視角に関心をもってきた。

(2) 生産拠点と領域史研究

以上のような経緯から申請者は生産拠点が作り出す領域構造に着目し、同じ標高と地形条件にある生産的居住領域について、異なる地方を対置させることで、人間の社会的活動と空間構造の関係性を歴史的に理解しようとするに至った。これまでの都市史研究が都市、集落を個別の対象としてきたのとは異なり、本研究が行う領域的アプローチは、環境史的広がりをもつ新たな視角をもつ。地理学、社会学、史学の知見を援用しつつ、生産拠点という人間の定住文化の原点に立ち戻る点においても、都市史研究における新機軸を打ち立てることが狙いである。

2. 研究の目的

本研究は北中部イタリアのヴェネト地方とトスカナ地方の2つの地理的領域を対象とする。それぞれの地方において、標高と地形条件が同程度の地域の生産的居住の空間＝社会構造を歴史的に解明し、比較を通じてそれぞれの特性を明らかにすることを目的とする。具体的には①地形、地質、植生の特質、②生

産構造が規定する社会、土地利用、空間構造の特質、③土地所有に注目し、人間と自然が相互に構築した環境を、構造的に解明することを目指した。調査対象は以下の通りで、トスカナとヴェネトにおいてそれぞれの生産拠点を抽出し調査と比較を行った。調査地は調整が必要となり、予定当初から若干変更したものもある。

- 1) アゾロ (Veneto、以下V) とモンテヴェットリーニ (Toscana、以下T)
- 2) ヴァルポリチェッラ (V) とセラヴェツァ (T)
- 3) ソアヴェ (V) とカルミニャーノ (T)

3. 研究の方法

史料調査から歴史的な空間構造を把握した後、絵図史料と土地台帳をもとに空間情報を図化し、さらに現状の実測調査によって得られた建築空間の情報を統合することで、該当地域の空間構造および社会構造を解明した。使用した史資料は以下である。

- 1) 文献史料の分析：郷土史、産業史、社会経済史研究。
- 2) 絵画史料の分析：古絵図、18、19世紀の不動産課税台帳および地籍図、建築図面
- 3) 実測調査による生産拠点の建築、敷地空間を図化した図面資料。

4. 研究成果

- 1) アゾロとモンテヴェットリーニ：城塞とヴィラを核とした領域構造

A. アゾロのヴィラ

先史時代の居住核、古代ローマ遺跡を有する城塞都市アゾロにおいて、都市骨格は12世紀以降に段階的に形成された。16世紀までのアゾロの空間および社会構造についてはL.ブリアンの研究に基づき遡及することができるが、本研究ではヴェネツィア国立文書館所蔵の16世紀の未耕地（ペーニ・インクルティ）の絵図、1717年の土地課税台帳絵図とナポレオン期カタストを史料とし、土地所

有とヴィラの立地とを考察した結果以下のことが明らかになった。

- ① 1717年の不動産課税台帳絵図から、ヴィラ・バルバロ、カ・ゼン、カ・モリンといったヴェネツィア貴族のヴィラと土地利用を明らかにした結果、これらがトンネルや橋の建設といった大規模な土地造成を伴うもので、未墾地開発の最前線に投じられたものであったことが明らかになった。
- ② ヴィラは耕地管理の拠点機能をもっただけでなく、アゾロ市民と家族単位で交流する社会的拠点であったことが、アゾロ市民ファロルフイの日記から明らかになった。
- ③ 丘陵地アゾロにまでヴィラが建設された背景には、干拓と灌漑の管理を行う未墾地 監 督 官 (Provveditori ai Beni Inculti) が作成した絵図史料の多さからも共有地を開発し私有地化する企図があった可能性が指摘できた。
- ④ 都市外部のフォレスト・ヴェッキオ沿いにはヴェネツィア貴族のヴィラが連続し、都市周縁部にはアゾロ市民がヴィラの建築をもつ傾向が強いことが明らかになった。

以上のように、丘陵地アゾロでは地形的特徴に応じて、土地利用、生産拠点としてのヴィラの立地と土地所有が特徴的であることが明らかになった。

B. モッテヴェットリーニのヴィラ・ファットリア

城塞集落モンテヴェットリーニの領域支配の特徴は、ヴィラ・ファットリアを中心とした生産管理の構造である。モンテヴェットリーニは16世紀末にメディチ家の介入を受け、旧領主館が生産管理拠点であるヴィラ・ファットリアに改造されたことで、地域の構造改革が開始された。とくに近現代まで継承

されたメツアドリア（地主と小作人との間で農地における収穫と費用とを等分に折半する折半小作契約）の頂点にあるファットリア、その下のポデーレ、そしてカーザ・コロニカという生産体制は、土地利用と土地所有に明瞭にあらわれていた。

- ① 17世紀のカブレイおよび絵図から、急峻な斜面地はオリーブ畑に、沼地は家畜の飼料用耕地として徹底的に利用され、土地利用が明示されていた。
- ② 1597年のヴィラ改修、1602年の定期市開設、1603年の広場へのロジgia建設、1605年の貯水槽建設、1606年集落間道路の舗装といった経緯から、地域の構造改革の拠点としてヴィラ・ファットリアが機能していたことが明らかとなった。
- ③ ファットリアには、ファットーレの館、穀物倉庫などの貯蔵設備、オリーブの搾油器やブドウ圧搾といった生産物の加工設備、道路や水路と接する港などの物流設備、レンガ釜などの建材施設、さらには小礼拝堂を含む一種の集落空間であったことが実測を通じて明らかとなった。

以上のように、ヴィラ・ファットリアは地域生産を集約する場であり、地域の生産体系と農地や土地利用の把握といった空間構造を管理する拠点であった。ヴィラ・モンテヴェットリーニはメツアドリアと大公直轄地として領域構造を特徴的に形成していることが明らかになった。

2) ヴァルポリチェッラとセラヴェツァ：採石加工産業にもとづく領域構造

C. ヴァルポリチェッラ

ヴェローナ北にあるヴァルポリチェッラ地域には核となる都市はない。連綿と続く丘陵にはネグラール、サントンブロージョ・ディ・ヴァルポリチェッラ、フマーネ、サン・ピエトロ・イン・カイアーノといった多数の集落が散在する。そのうちピンク大理石を産出す

る集落プルンに生産加工拠点は散在している。石材は主としてアディジェ川を運搬経路とするが、途中の丘陵集落であるサン・ジョルジョでも使用が認められた。サン・ジョルジョは斜面地に建ち、削られた基盤岩とプルン産の石材を混在させることで建設されたロマネスク聖堂、住居、テラスと石堀が存在する。本調査ではサン・ジョルジョ集落を実測することで下記が明らかになった。

- ① 18世紀からオステリア（宿屋兼酒屋）であったD邸の建築および敷地を実測した結果、岩盤と石材を活用した建築空間を明らかにすることができた。
- ② サン・ジョルジョ集落の下部に位置するサレーゴ・アリギアーリは集落＝ヴィラといえる巨大なヴィラであり、水路を廻らせ多数の泉を有する敷地内の生産加工空間には多くのプルン産石材の活用を確認することができた。
- ③ 石材はこの地域に特有の貯水槽にも使用され、プルンから南にいたる地域全体の特徴的な景観を形成している。

以上のように、ヴァルポリチェツァは多数の集落がある一方で、巨大なヴィラが集落と同規模で点在し、複雑に織り成す領域構造が特徴的といえる。

D. セラヴェッツァ

メディチ家が大理石と銀の生産加工拠点として備えたヴィラ・セラヴェッツァが地域構造の拠点となっている。16世紀、19世紀の様子は絵画史料が示す通り、現在も川沿いの立地は変わらない。当該地の大理石は薄紫と緑、ピンクとグレーのマーブル模様がついたミスキオと呼ばれるもので、コジモー世が重用した。政治戦略上きわめて重要だったフランチェスコ一世の結婚祝祭に際する利用の多さからも顕著であり、フェルディナンド1世も1597年7月9日にはミスキオの使用を奨励する一方で、採石を取り締まる法令を發布している。

ヴィラに関する調査から下記が明らかになった。

- ① ヴィラは建設当時よりファブbrica（工場）と呼ばれていること、付属建物として竈、養魚池といった生産加工機能をもつ空間が配置されていること、簡素なヴィラの空間構成からも、ヴィレツィアトゥーラ（田園での余暇生活）を目的としたものではないことが明らかになった。
- ② 一帯は川を流通路とした完全な産出地帯となっており、集落内の住宅において大理石の利用痕跡はほとんどないことから、産品は専らフィレンツェに出荷されるだけであった領域構造が明らかになった。

以上のように、セラヴェッツァはヴィラを拠点とした採石のための産業地帯といえる場所であり、一方でミスキオの保護政策は産出地域における石材利用をも抑制するものであったと観察できた。

3) ソアヴェとカルミニャーノ：ワイン生産のための丘陵地の土地利用

E. ソアヴェ

ヴェネトの丘陵に立地する城塞都市ソアヴェについてはポルトラミによる研究「チッタ・ムラーテ」（1988年）、G.M. ヴァラニーニの研究があるが、その空地の多さと丘陵における生産加工拠点としての読解はこれまでなされていない。現在ではワイン生産で知られるソアヴェについて、本研究ではインフラと空地という観点から都市を解読した。

- ① 13世紀のパラッツォ・ジュスティツィアの建設経緯、戦場としての機能からソアヴェは領域における社会インフラとしての役割を負っていたことを明らかにした。
- ② 16世紀のソアヴェでは、都市環境を整備した都市内用水路「ガイボ」の開削と閉鎖が街路の性格を決定づけていたことを明らかにした。

- ③ 1815年のナポレオンカタストをもとに都市内外の土地利用を明らかにした結果、コダルンガ沿いに都市内農地が

群生、柳の育成は土地利用、ワイン生産のために不可欠な要素であり、生産サイクルの一環であることが明らかになった。



「saggio aperto」と呼ぶ方で、古道や水路に分節されつつ、生産することが明らかになった。はファットリアにヴので、生産加工の拠が実測から明らかに、耕地、領域という

図1 1815年のソアヴェの生産地点とを概都市内の土地利用が街路性（ナポレオン期土地課税台帳絵図に筆者加筆）

よりも生産性を重視した居住が展開されていたと指摘できた。

ボナコ様を模する領域構造において、生産加工の空間的論理が貫かれていることが明らかになった。

F. カルミニャーノ

カルミニャーノは丘陵集落であり、18世紀から高品質ワインの産地として保護されてきた地理的領域でもある。本調査では、1820年代のカタスト（不動産登記絵図）と現在の航空写真および現地実測から、耕地の地割、水路、農家の空間構造を読み解いた結果、以下が明らかになった。

- ① 生産加工拠点は3段階あり、ヴィラ＝ファットリア＞ポデーレ＞カーザ・コロニカといったメツァドリアにもとづく生産体系は、立地、空間規模、建築空間の機能において現在もその痕跡が残されている。古道の利用、水路における葦類の

以上、3セットの6地域の調査を行った結果、同様の産業を生業としつつも、トスカナとヴェネトにおいてその差は顕著であった。

1) にみたようにヴェネツィア貴族とアゾロ市民がヴィラ建設と立地に大きな違いをつくり出していたアゾロに対して、モンテヴェットリーニはメディチ家大公による地域改造の拠点としてヴィラが改造されるという経緯をもっていた。2) では、散村型のヴァルポリチェッラとヴィラ直轄型のセラヴェッツァとは、同一の採石加工を生業としながらも、大きく異なる領域構造をつくり出していた。3) ではワイン生産の歴史を長く持つ両地域であるものの、都市内空地をワインの加工空

間として活用してきたソアヴェの独自の土地利用に対して、カルミニャーノはメツァドリアの痕跡を強く残しており、領域全体が生産加工を分業する構造になっていたことが明らかになった。

以上のように地理的、標高条件が同等であっても、生産拠点がつくり出す領域構造は土地所有と土地利用によってトスカナとヴェネトにおいて大きく異なっていた。領域史的視野が求められる都市史研究において、生産拠点に注目して領域構造を読み解く比較都市史研究であり、都市史研究における新たな方法論構築を提示したといえる。

<主要引用文献>

- *Città Murate del Veneto*, a cura di Sante Bortolami, Milano, 1988.
- *Soave, terra amenissima, villa suavissima*, a cura di Giancarlo Volpato, Soave, 2002.
- Daniela Mignani, *Le ville Medicee di Giusto Utens*, Perugia, 1993.
- L. Cantini, *Legislazione Toscana*, II, Firenze, 1801.
- a cura di Andrea Tenerini, *Palazzo Mediceo di Seravezza*, Seravezza, 2014
- a cura di Guido Rosada, *Asolo, Veneto, Atlante storico delle città italiane*, Venezia, 1993.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

1. 辻本悠真、青山貴宥、鮎川なつき、赤松加寿江「トスカナ州カルミニャーノにおける生産構造の領域史的研究」『日本建築学会学術講演梗概集』建築歴史・意匠、2017年8月、掲載決定
2. 赤松加寿江「書評 イタリア建築紀行一ゲータと旅する7つの都市一渡辺真弓」『地中海学研究』地中海学会、2016年6月、第39号、pp. 84-88.
3. 赤松加寿江「ジョルジョ・ヴァザーリと1565年の婚礼祝祭」『日伊文化研究』日伊協会、2016年3月、第54号、pp. 36-47.
4. 赤松加寿江「近世アゾロにおけるヴィラとパエサッジョ」『中近世ヴェネトの領域史』東京大学、第1号、2016年2月、pp. 51-62.
5. 赤松加寿江「16世紀後半のメディチ家のヴィラとフチェッキオ沼」『年報都市史研究 沼地と都市』第21号 山川出版社 2014年3

月、pp. 78-94.

6. 赤松加寿江「フェルディナンド1世のアルノ川流域における領域支配とヴィラ・アンブロジャーナ」『日本建築学会学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠、2012年9月、pp. 951-952.

[学会発表] (計 3 件)

1. 赤松加寿江「ヴェネトの丘陵地帯における居住と生産の領域：ソアヴェのテリトリオ」地中海学会月例研究会、2015年7月18日
2. 赤松加寿江「フェルディナンド1世のアルノ川流域における領域支配とヴィラ・アンブロジャーナ」日本建築学会大会、2012年9月
3. 赤松加寿江「イタリア・トスカナ地方アルノ川流域における沼とヴィラ」都市史研究会シンポジウム「沼地と都市」東京大学、2012年12月16日

[図書] (計 4 件)

1. 赤松加寿江「近世ヴィラにみる大地と資源」並木誠司編著『表象された都市』昭和堂、2017年7月、pp. 144-166.
2. 布野修司編著『世界都市史事典』（「ピサ」「パドヴァ」「ヴェローナ」「ピエンツァ」「ヴィチエンツァ」を担当）昭和堂、2017年12月刊行予定。
3. Kazue AKAMATSU, “Villas and the Arno River Basin in Tuscany”, in *Space, Culture, and Regeneration of Cities in History, From the Viewpoint of International Comparison of Territory and Infrastructure*, International Symposium Proceedings, 2012年12月、pp. 152-161.
4. Kazue AKAMATSU, “The Control of the Arno Basin and Villa Ambrogiana in the Late Sixteenth-Century in Tuscany” in *Territory and Urban Settlement along Water, Comparative Studies on Friesland and Other Areas in History*, International Round-table, 2012年9月、pp. 39-51.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤松 加寿江 (Akamatsu, Kazue)
京都市芸繊維大学・グローバルエクセレンス・講師

研究者番号：10532872